

期前葉から晩期前葉までの土器を含むが、後期中葉以降の土器の出土量が多くなる。第37図199は加曾利B式、200は安行1式、201～203は安行3a式、204、205は大洞BC式、206、207は後・晩期安行式に伴う粗製土器と考えられる。

第38図は、出土層位及びグリッドが不明な土器のうち、特徴的なものを掲載した。208～210は前期前葉関山式と考えられる。注記をみる限り、第1次調査には存在しないB14グリッドから出土したとされる。底部だけが数点まとまって収納されていた。211は阿玉台式土器の口縁部である。212は加曾利EIV式と考えられる口縁部である。213は加曾利B式である。214は加曾利B式に並行する、近畿地方の元住吉山I式に類似する土器である。215は安行1式である。217は安行3a式と考えられる。218、219は安行3c式と考えられる。220、221は前浦直前型式と考えられる。222は大洞BC式で、223は大洞C式と考えられる注口土器である。224は未注記ながら、山野貝塚から発見されたとされる注口土器である。東北地方の後期後葉の瘤付土器と思われる。

(2) 7 トレンチ (第39～41図)

概要

7トレンチは、東貝層貝層散布範囲東端部に設定したトレンチである。南西―北東方向に2×8mの規模で設定し、S I 06内の遺構内貝層が確認された面まで調査した。S I 06内で遺構内貝層が検出されたが、S I 06については第2節で記載する。

層序

層序は、1層耕作土、2a層新期テフラ層、2c層暗褐色土層、4～6：S I 06覆土となる。2c層は堀之内式期の遺物包含層で、S I 06とともに2a層の新期テフラに被覆される。貝層はS I 06覆土下層で4ブロックに分かれて検出された。

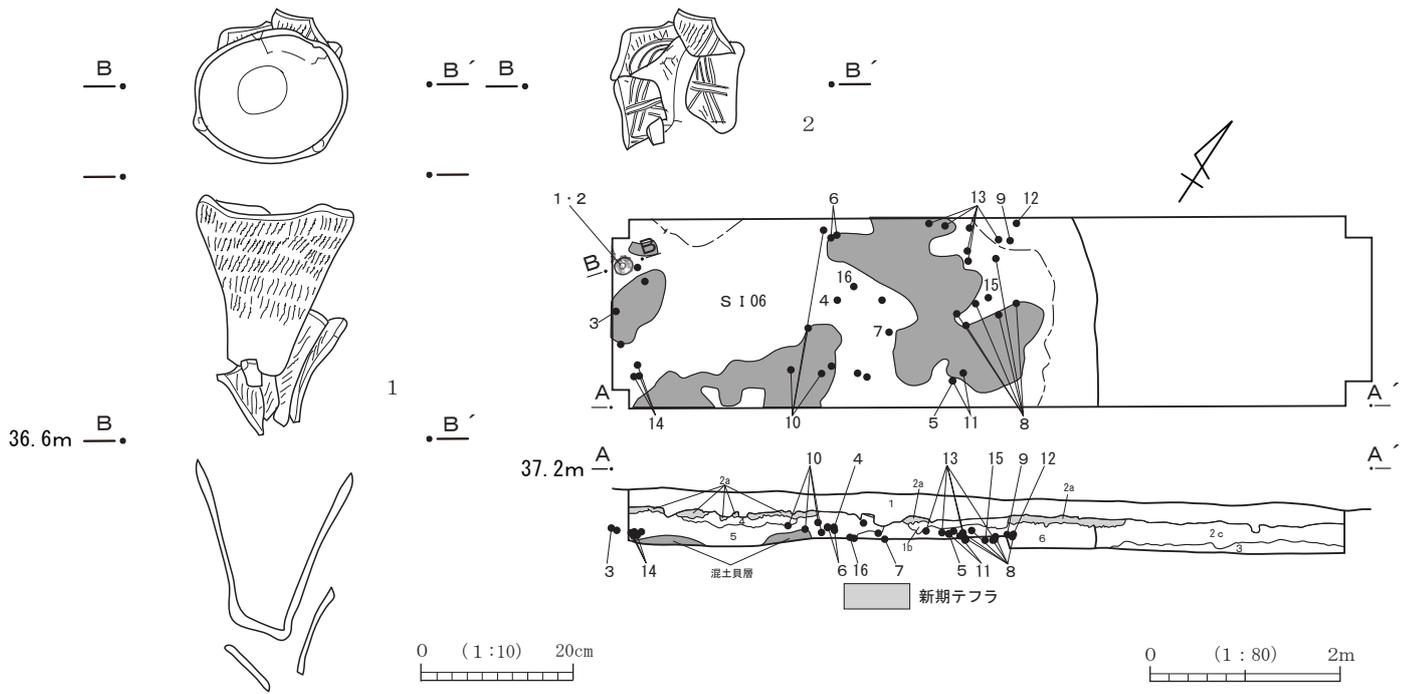
出土遺物

S I 06を除いた土器出土量は、精製土器10,435.43g、粗製土器8718.69g、不明7,765.08gである。精製土器では後期前葉8,348.41g、後期中葉811.49g、後期後葉1,128.98g、晩期前葉146.95gとなる。粗製土器では縄文のみ3,712.92g、縄文+紐線文83.22g、縄文+紐線文+条線文1,055.49g、紐線文+条線文1,496.50g、条線文のみ149.65gとなる。精製土器では堀之内1式を主体とする後期前葉の土器が約80%と圧倒的に出土量が多くなるが、粗製土器をみると、後期中葉～後葉に相当する紐線文や条線文の土器の比率が50%強となる。土器以外の出土遺物は、土製品が土器片錘1点、土製円盤6点、石器が二次加工ある剥片2点、剥片2点、石核2点、磨石1点、敲石1点、軽石製品1点である。

(3) 11 トレンチ (第42・43図)

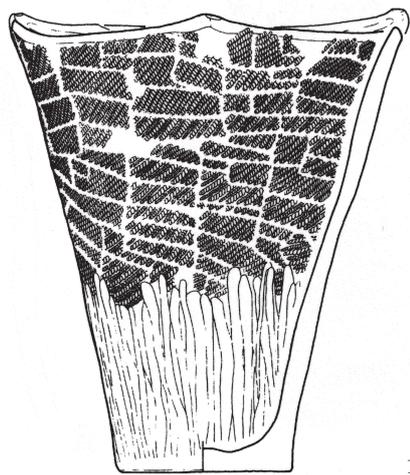
概要

11トレンチは、東貝層の貝層堆積範囲の南東端に設定したトレンチである。東西方向に2×8mの規模で設定し、トレンチ北側と南側は地山ローム面までサブトレンチを入れ調査した。トレンチ中央やや西側で検出された近現代と思われる溝によって一部破壊されているが、貝層はトレンチのほぼ全面で検出された。南側サブトレンチの東側において、C層の堀之内1式期の遺物包含層が円形に落ち込む箇所を確認した。トレンチ西側の南壁A混土貝層で、30×30×5cm単位のコラムサンプルを6カット採取した。

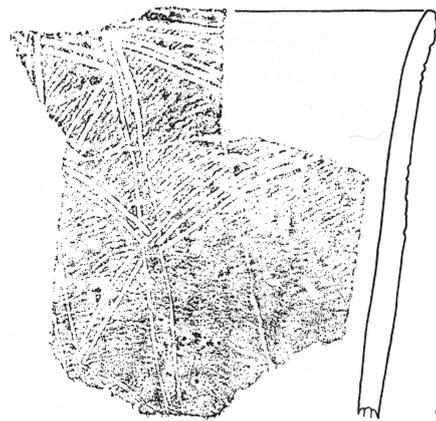


7トレンチ

- 1. 耕作土(軟質)
- 1 b. 耕作土(やや軟質)
- 2 a. 新期テフラ 明褐色土粒がこの幅の中に拡散しており、全体的にもやっとした形で把握されているもので4Tのものと比較すれば明瞭ではない。
- 2 b. 耕作土(やや軟質)
- 2 c. 暗褐色土 遺物包含層。
- 3. ソフトローム 上半は2 c層より漸移的で汚れているような状況。
- 4. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒中量。焼土粒微量。やや軟質。粘性やや乏しい。
- 5. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒少量。焼土粒微量。軟質。粘性やや乏しい。4層より若干暗い。
- 6. 褐色土 ローム粒≧黒色粒主体。焼土粒少量。やや軟質。粘性やや乏しい。



1

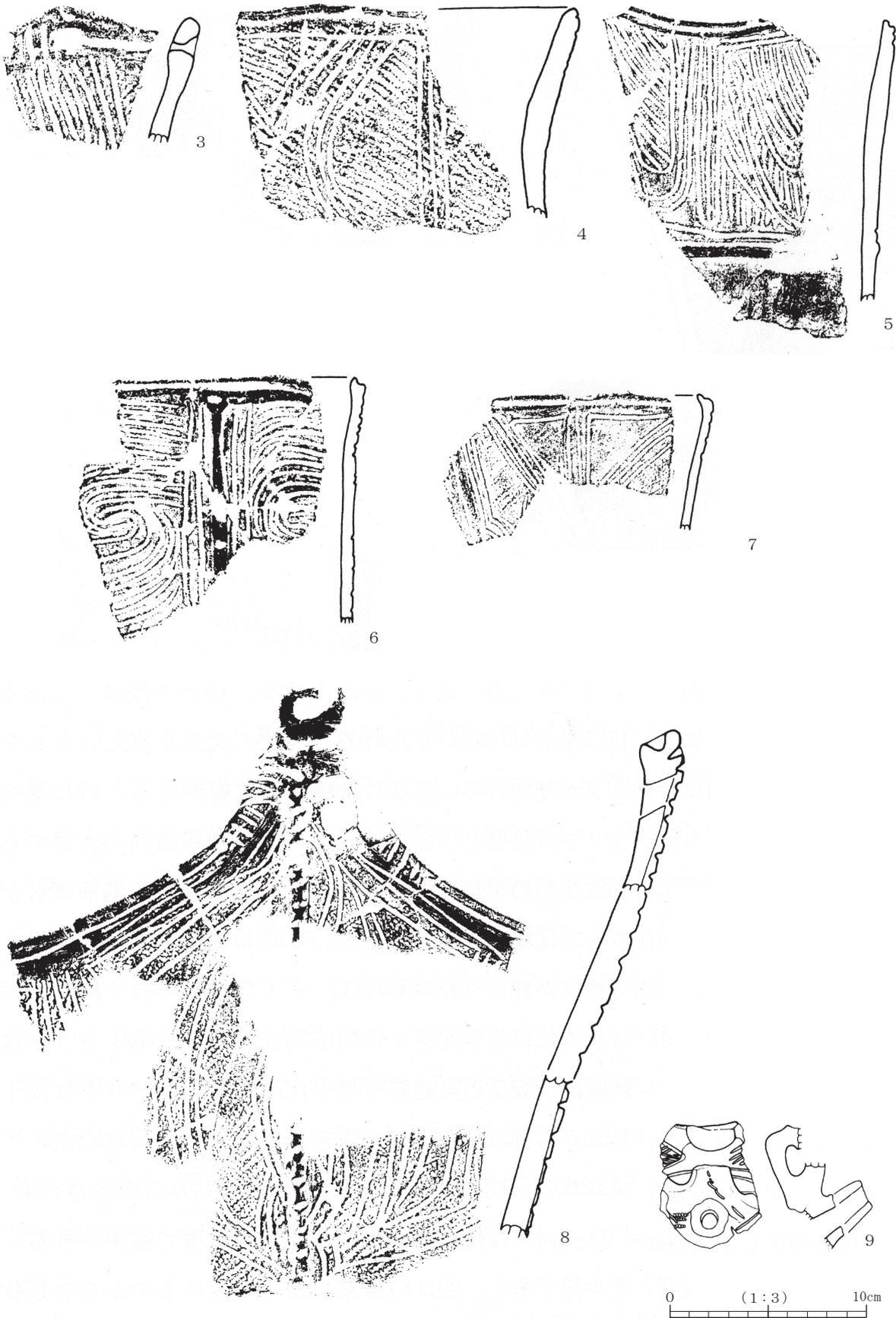


2

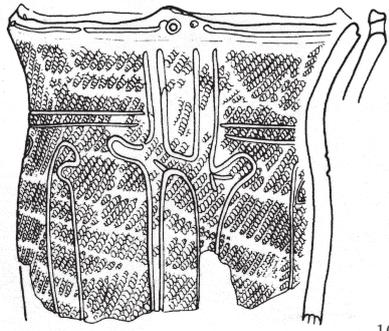
(No. 1)
0 (1:4) 10cm

0 (1:3) 10cm

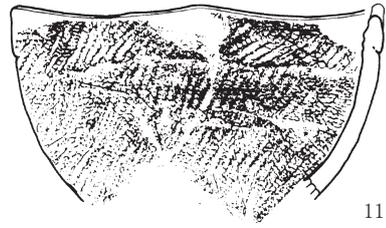
第39図 7トレンチ (S I 06) 遺構配置図、出土土器 (1)



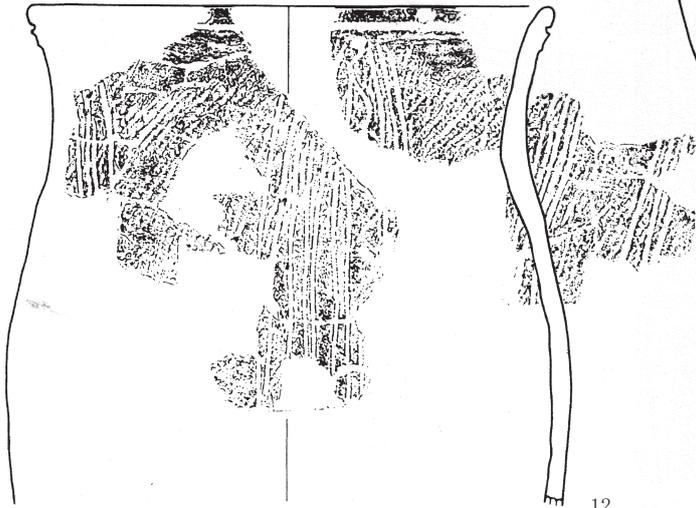
第40図 7トレンチ (S I 06) 出土土器 (2)



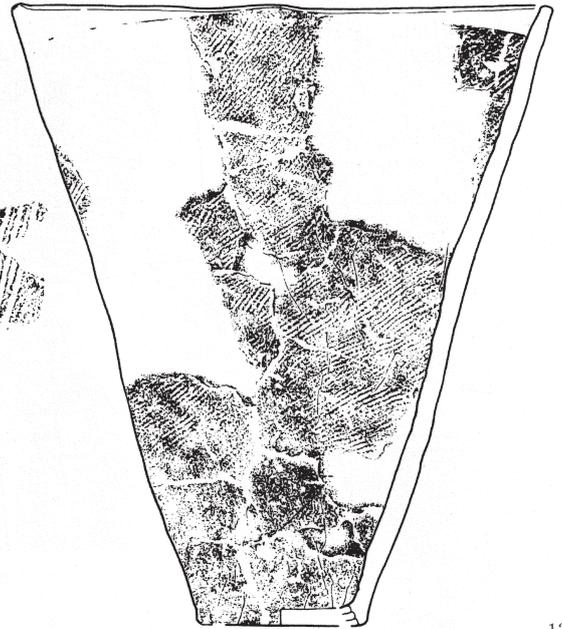
10



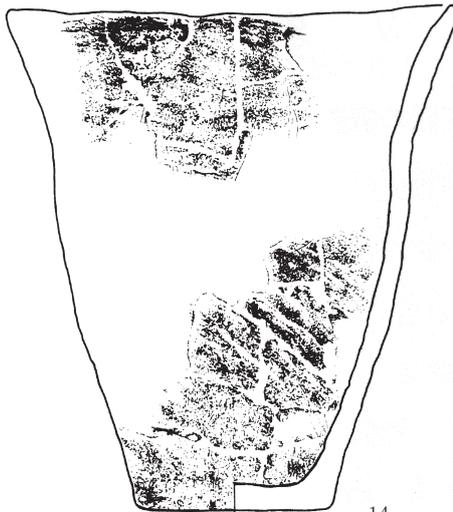
11



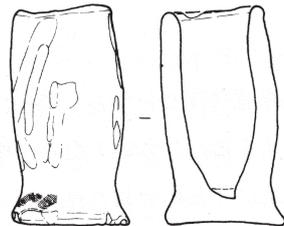
12



13



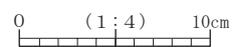
14



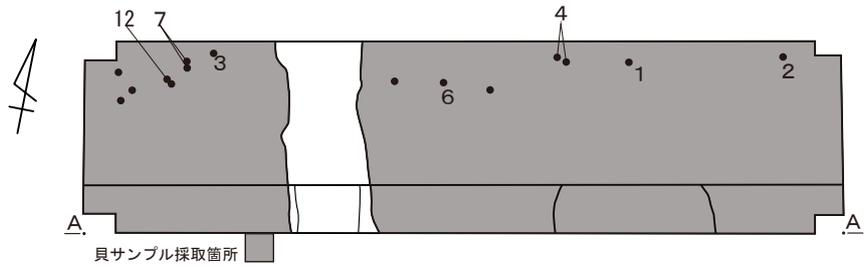
15



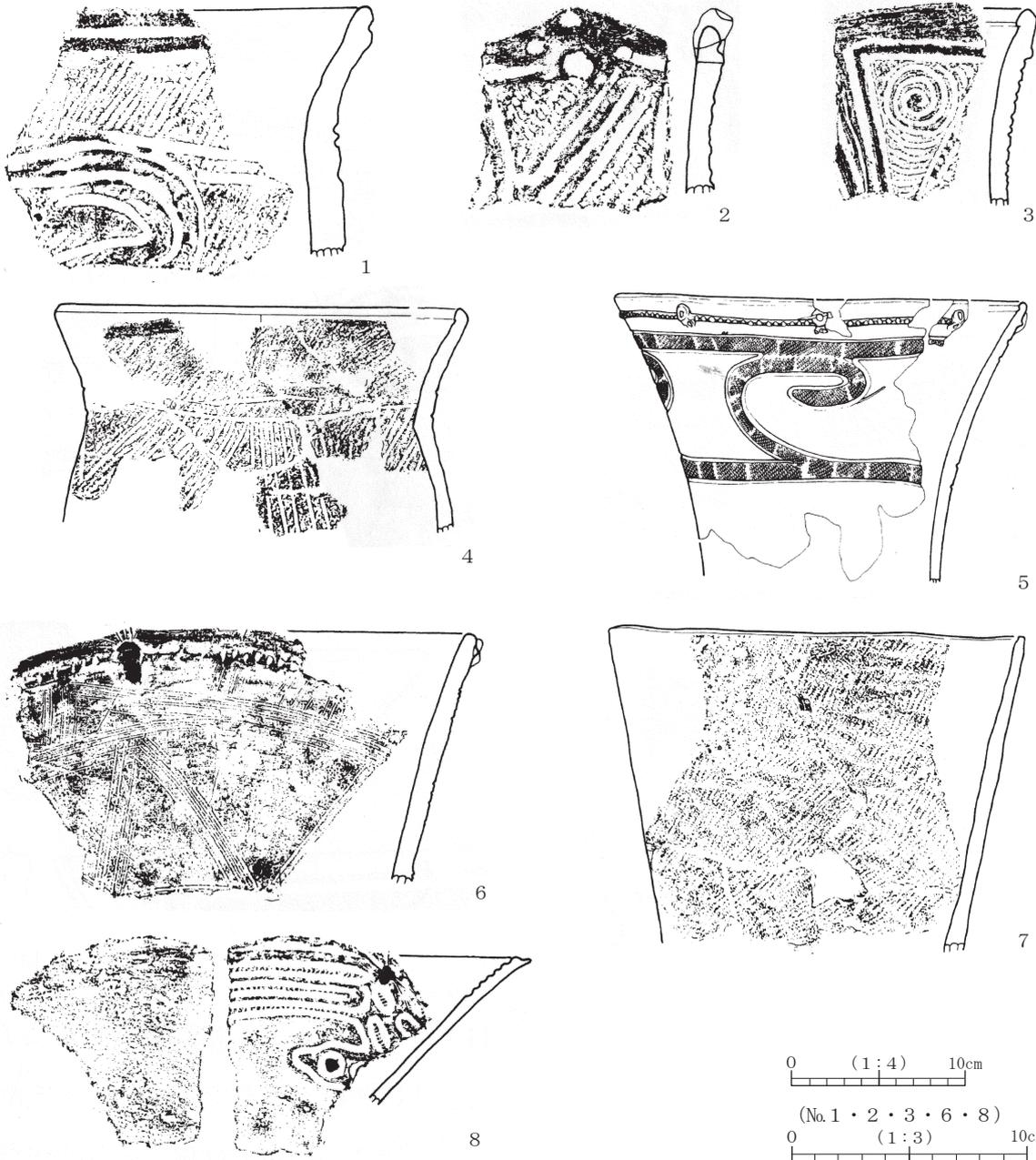
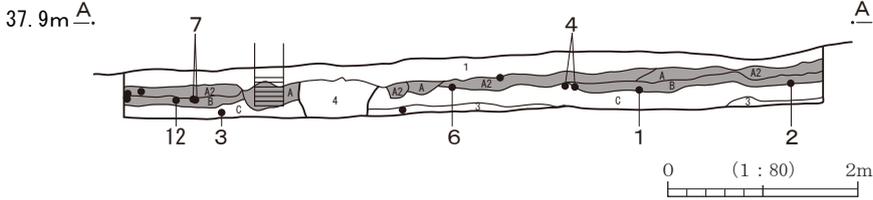
16



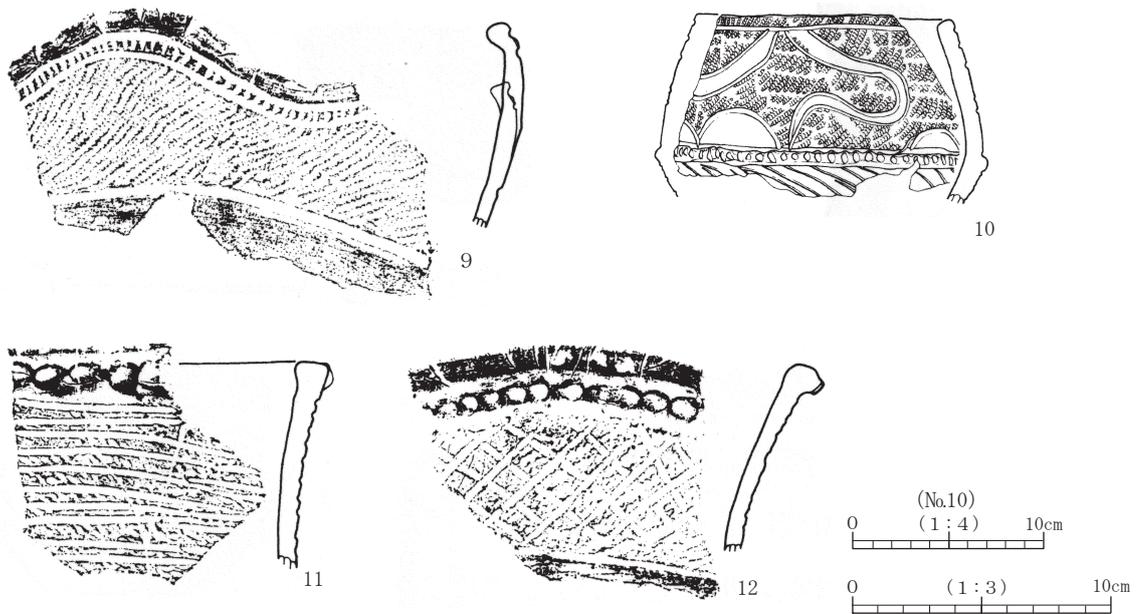
第41図 7トレンチ (S I 06) 出土土器 (3)



- 11トレンチ
- 1. 表土 (山林の腐植土)
 - A. 混貝土 混土率40% ハマグリ・キサゴ・サルボウ・ツメタガイ等を含む。
 - A2. 混貝土 混土率80% 破砕貝を含む。
 - B. 混貝土 混土率95% 暗褐色土、微量の破砕貝含む。堀之内2式包含。
 - C. 褐色土 黒色粒ニローム粒主体。焼土粒微量含む。堀之内1式包含。軟質。



第42図 11トレンチ遺構配置図、出土土器 (1)



第43図 11トレンチ出土土器（2）

層序

層序は、1層表土、A層混土貝層、A2層混貝土層、B層混貝土層、C層褐色土層、3層漸移層となる。貝層は4～20cmの厚さで堆積しており、A層混土貝層はハマグリ、イボキサゴ、サルボウ、ツメタガイを含む。A2、B層の混貝土層は破碎貝を含む。C層は焼土粒をわずかに含む褐色土層である。

出土遺物

土器出土量は、精製土器 11,570.86 g、粗製土器 8,237.56 g、不明 8,026.45 g である。土器の出土比は、精製土器では後期前葉 8,066.37 g、後期中葉 3,113.23 g、後期後葉 39.1.26 g、粗製土器では、縄文のみ 2,954.35 g、縄文+紐線文 322.10 g、縄文+紐線文+条線文 3223.39 g、紐線文+条線文 356.55 g、条線文のみ 1,313.01 g となる。精製土器では後期前葉が約70%で、そのうち堀之内2式が約20%を占め、他のトレンチと比べて高い比率を示す。粗製土器では、後期前葉に相当する縄文のみと縄文+紐線文が40%、後期中葉に相当する縄文+紐線文+条線文が40%と同じ比率となる。貝層部分ではこれらの時期の土器が混在して検出されており、貝層の大部分は堀之内1式期に形成されたと考えられるが、一部には加曾利B式期以降に形成された貝層が含まれる可能性もある。

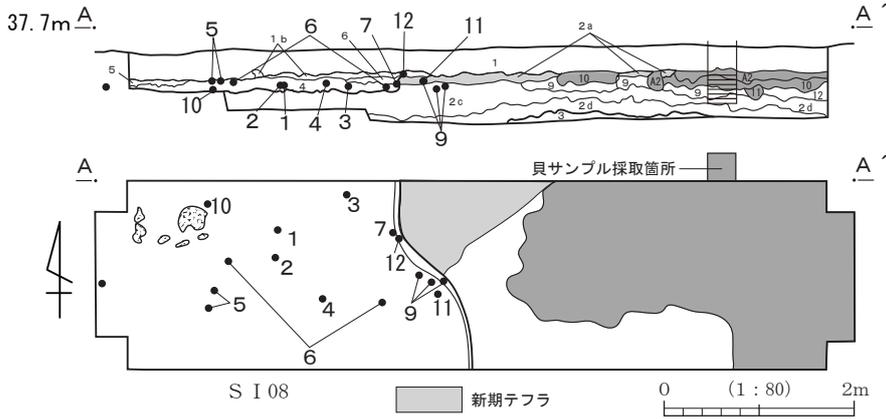
土器以外の出土遺物は、土製品が土製円盤3点、耳飾1点、石器が石鏃1点（第88図6）、二次加工ある剥片1点、剥片2点、磨石2点、敲石1点、石皿1点、軽石製品3点、骨角歯牙製品が鏃1点（第98図2）、垂飾1点（第99図37）である。

2 西貝層

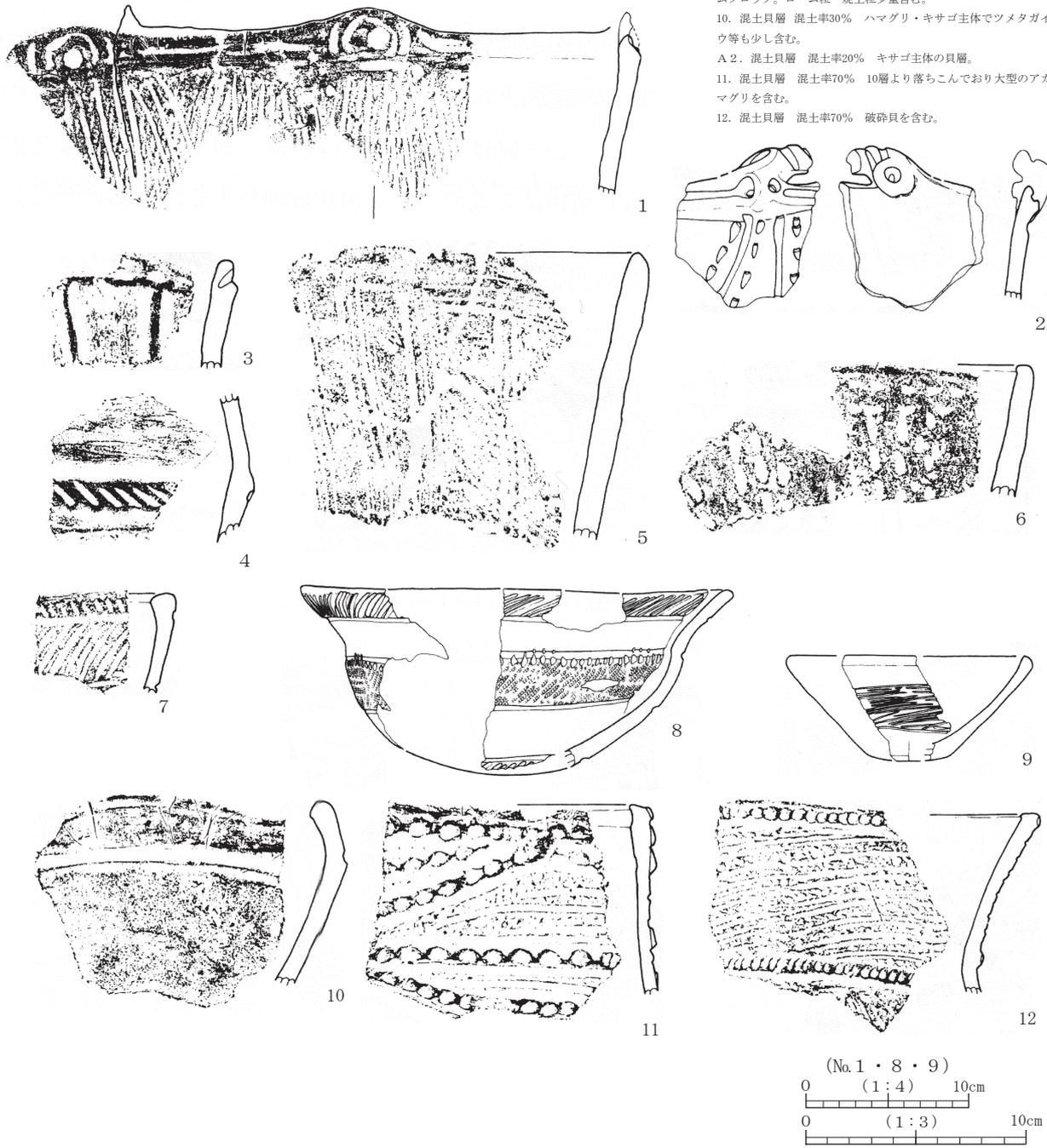
(1) 4トレンチ（第44図）

概要

4トレンチは、西貝層中央やや北側の貝層堆積範囲外縁に東西方向に2×8mの規模で設定した。トレンチ東側半分は貝層、西側半分は加曾利B式期の住居（S I 08）が検出された。これらの遺構が検出された

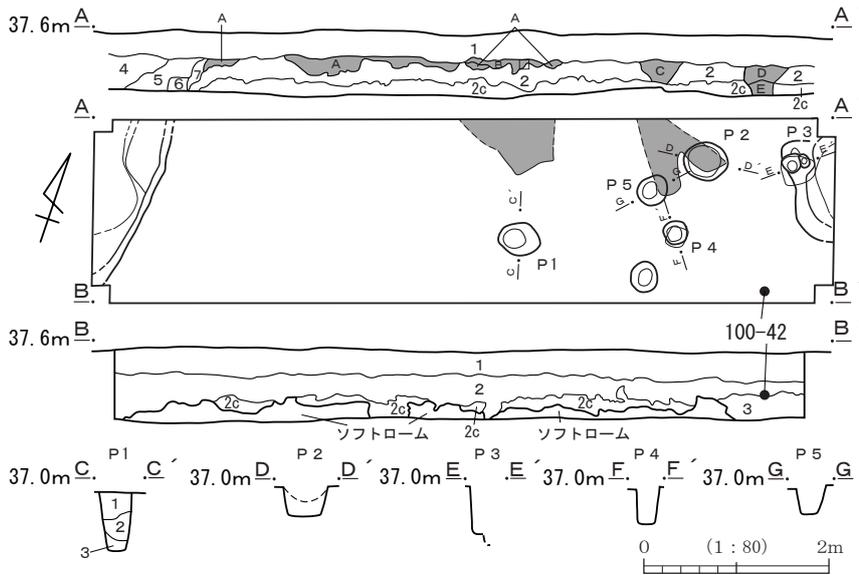


- 4トレンチ
1. 耕作土 しまりなし
 - 1 b. 耕作土 1層より以前の耕作土。しまりあり。
 - 2 a. 新期テフラ相当層 全体として明褐色を呈すが、細かくみると褐色土層中に明褐色土のテフラ粒子が拡散している状態を呈している。4TW'-E' secによると貝層の上面に堆積していた可能性がある。
 - 2 c. 暗褐色土 黒色粒主体、ローム粒少量、焼土粒少量含む。遺物包含層。しまりあり。粘性やや乏しい。
 3. ソフトローム相当層 2 c層との境界は漸移的で上面は汚れているような状態。
 4. 暗褐色土 2 c層より若干明るい。黒色粒主体。ローム粒(新期テフラ粒?)少量。焼土粒少量含む。堆積やや密。粘性乏しい。加B3期住居跡覆土。
 5. 暗褐色土 4層より若干明るい。黒色粒主体≧ローム粒(新期テフラ粒?)が霜降状に混じりあう。堆積やや密。粘性乏しい。加曾利B3期住居覆土。
 6. 褐色土 ローム粒(新期テフラ粒?)≧黒色粒主体。焼土粒少量含む。堆積やや疎。粘性乏しい。
 7. 混土貝層 混土率80% 破碎(ほとんど粉状に近い)貝を含む。
 8. 混土貝層 混土率80% 破碎貝を含む。7層より貝の遺存度は良い。
 9. 黒色有機質土 貝層周辺の生ごみの腐植による土層。φ5mm以内のロームブロック。ローム粒・焼土粒少量含む。
 10. 混土貝層 混土率30% ハマグリ・キサゴ主体でツメタガイ・サルボウ等も少し含む。
 - A 2. 混土貝層 混土率20% キサゴ主体の貝層。
 11. 混土貝層 混土率70% 10層より落ちこんでおり大型のアカニシ・ハマグリを含む。
 12. 混土貝層 混土率70% 破碎貝を含む。



第44図 4トレンチ (S I 08) 遺構配置図、出土土器

8 トレンチ

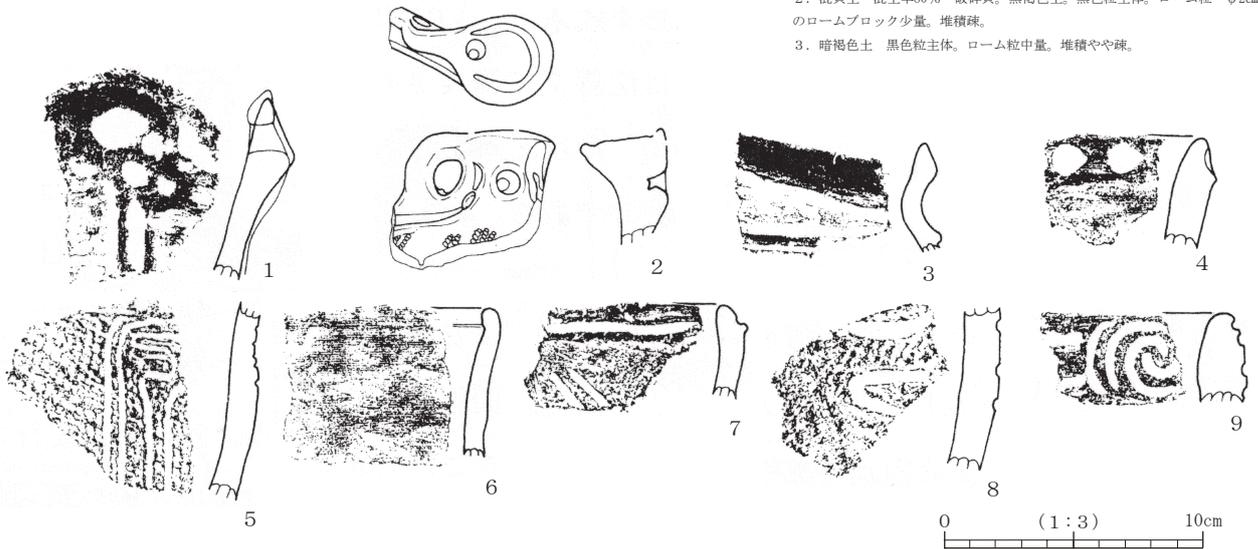


8 トレンチ

1. 表土(耕作土) 破砕された貝層主体。黒褐色を呈す。
 2. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒・φ2cm以下のソフトロームブロック少量と焼土粒微量が混じる。堆積やや疎密。
 - 2c. 褐色土 黒色粒≧ローム粒までに混入。やや疎の堆積。
 3. 暗褐色土 黒色粒>ローム粒主体。破砕貝層少量含む。落ちこみの土層。
 4. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒少量。焼土粒・炭化粒微量。しまりあり。落ちこみの土層。
 5. 褐色土 黒色粒≦ローム粒主体。焼土粒微量。しまりあり。落ちこみの土層。
 6. 褐色土 黒色粒≦ローム粒主体。ややしまりあり。落ちこみの土層。
 7. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒・ロームブロック(4~5cm大)中量混入。落ちこみの土層。
- A. 混貝土 混土率60% ハマグリ・キサゴ他 脆弱で破砕されたものが多い。黒色粒主体。ローム粒・焼土粒・炭化粒少量含む。
- B. 灰 混貝土を含む。灰・黒色粒主体。ローム粒微量。焼土ブロック少量。被熱された破砕貝少量。しまりやや密。
- C. 混貝土 混土率60% 脆弱で破砕されたものが多い。堆積はやや疎。落ちこみ状の土層。黒褐色。黒色粒主体。ローム粒・炭化粒少量。焼土粒微量含む。
- D. 混貝土 混土率60% 細かな破砕貝含む(キサゴ主体?) 堆積はやや密。
- E. 暗褐色。黒色粒≧ローム粒・φ2~5cmロームブロック少量。
- F. 混貝土 混土率90% D層と同じ破砕貝。堆積は密。褐色。ローム粒>黒色粒・φ1~2cmロームブロック。

8 トレンチ P1

1. 混貝土 混土率85% 破砕貝。暗褐色土。黒色粒主体。ローム粒・φ1cm以下のロームブロック少量。堆積疎。
2. 混貝土 混土率80% 破砕貝。黒褐色土。黒色粒主体。ローム粒・φ2cm以下のロームブロック少量。堆積疎。
3. 暗褐色土 黒色粒主体。ローム粒中量。堆積やや疎。



第45図 8 トレンチ (S I 09) 遺構配置図、出土土器

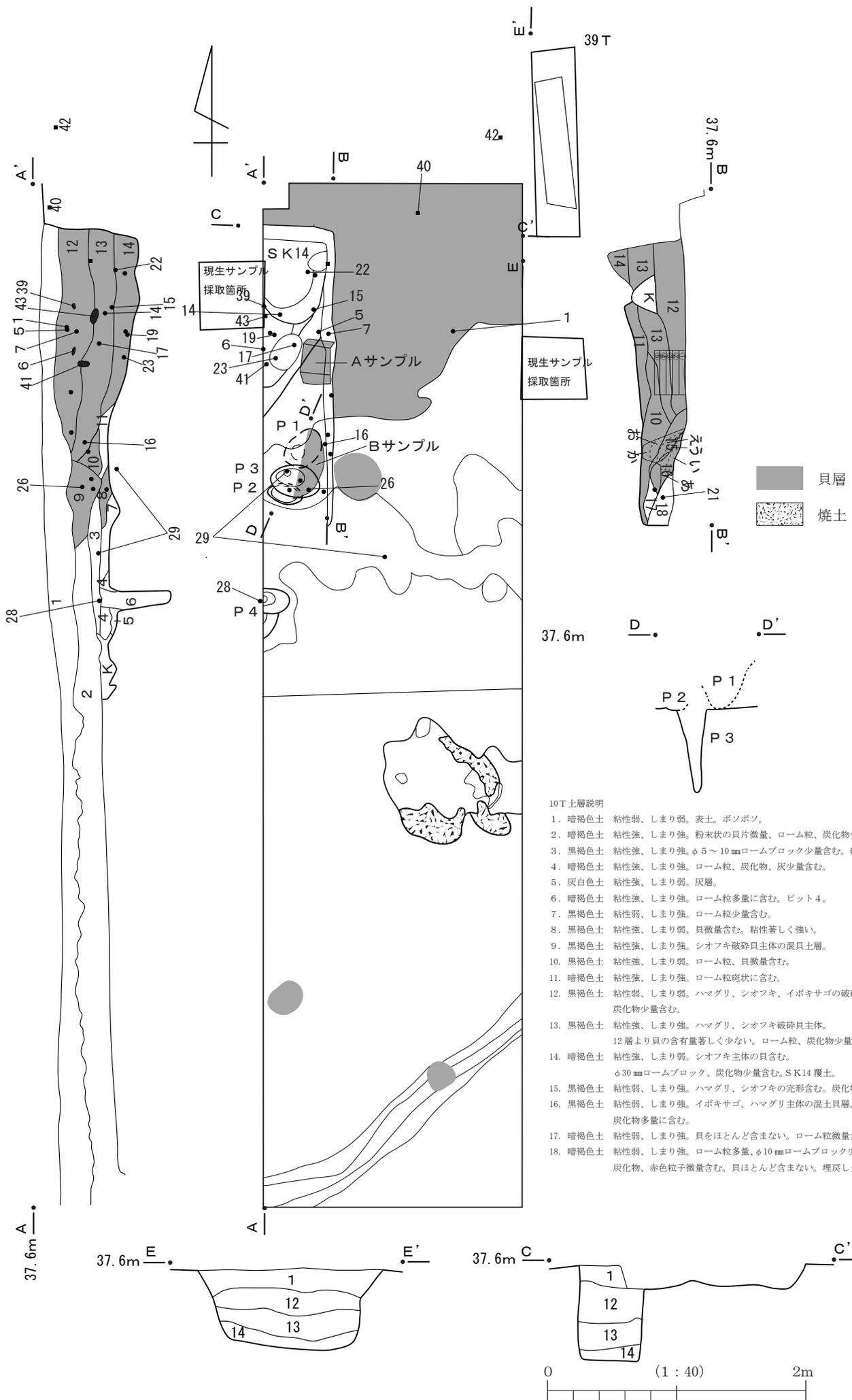
耕作土下約 25 cm まで全面的に調査し、北側の調査壁に沿ってサブトレンチを設定し貝層及び住居の精査を実施した。貝層については 30 × 30 × 5 cm 単位のコラムサンプルを 6 カット採取した。なお、加曽利 B 式期の住居については第 2 節で記載する。

層序

層序は 1 層耕作土、2 a 層新期テフラ層、2 c 層暗褐色土層、2 d 層漸移層となる。貝層は、A 2 層はイボキサゴ主体の混土貝層で、10 層はハマグリ、イボキサゴ主体の混土貝層、11 層はハマグリをやや含む貝層である。

出土遺物

土器出土量は、精製土器が中期中～末葉 241.19 g、後期前葉 13,379.39 g、後期中葉 3,469.68 g、後期後葉 521.61 g、晩期前葉 38.71 g、粗製土器が縄文のみ 6,789.70 g、縄文+紐線文 320.01 g、縄文+紐

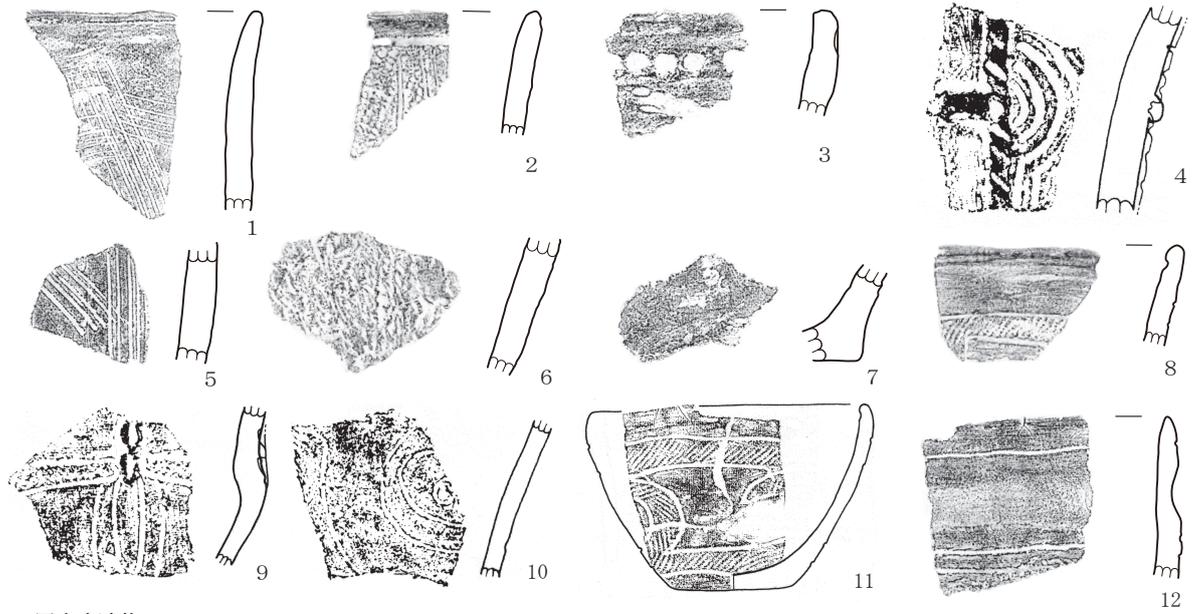


10T土層説明

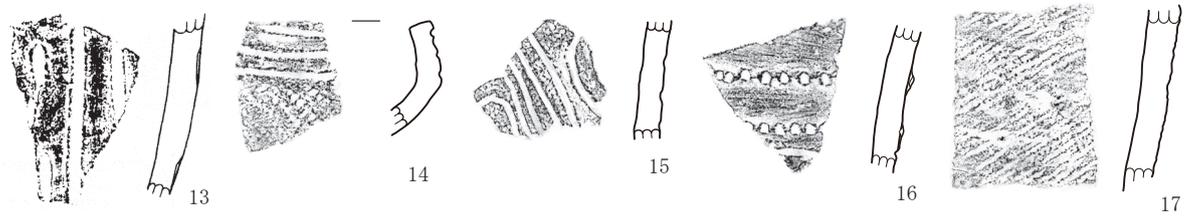
1. 暗褐色土 粘性弱、しまり弱。表土。ボソボソ。
2. 暗褐色土 粘性強、しまり強。粉末状の貝片微量、ローム粒、炭化物少量含む。
3. 黒褐色土 粘性強、しまり強。φ5~10mmロームブロック少量含む。硬化面。
4. 暗褐色土 粘性強、しまり強。ローム粒、炭化物、灰少量含む。
5. 灰白色土 粘性強、しまり弱。灰層。
6. 暗褐色土 粘性強、しまり強。ローム粒多量に含む。ピット4。
7. 黒褐色土 粘性弱、しまり強。ローム粒少量含む。
8. 黒褐色土 粘性強、しまり弱。貝微量含む。粘性著しく強い。
9. 黒褐色土 粘性強、しまり強。シオフキ破砕貝主体の混貝土層。
10. 黒褐色土 粘性強、しまり弱。ローム粒、貝微量含む。
11. 暗褐色土 粘性強、しまり強。ローム粒斑状に含む。
12. 黒褐色土 粘性弱、しまり弱。ハマグリ、シオフキ、イボキサゴの破砕貝主体。炭化物少量含む。
13. 黒褐色土 粘性強、しまり強。ハマグリ、シオフキ破砕貝主体。12層より貝の含有量著しく少ない。ローム粒、炭化物少量含む。
14. 暗褐色土 粘性強、しまり弱。シオフキ主体の貝含む。φ30mmロームブロック、炭化物少量含む。SK14覆土。
15. 黒褐色土 粘性弱、しまり強。ハマグリ、シオフキの完形含む。炭化物少量含む。
16. 黒褐色土 粘性弱、しまり強。イボキサゴ、ハマグリ主体の混土貝層。炭化物多量に含む。
17. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。貝をほとんど含まない。ローム粒微量含む。
18. 暗褐色土 粘性弱、しまり強。ローム粒多量、φ10mmロームブロック少量、炭化物、赤色粒子微量含む。貝ほとんど含まない。埋戻し土の可能性あり。

第46図 10トレンチ遺構配置図

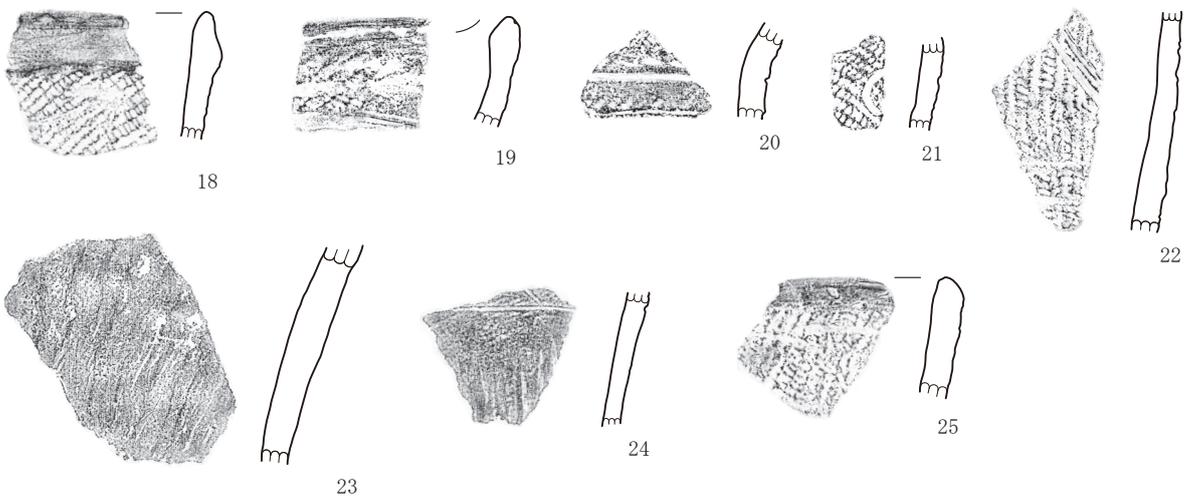
12層出土遺物



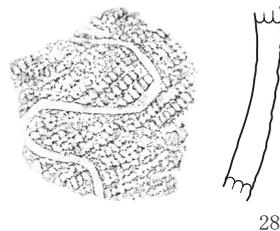
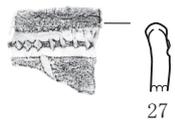
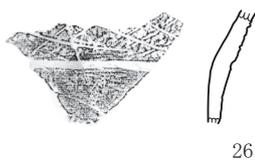
13層出土遺物



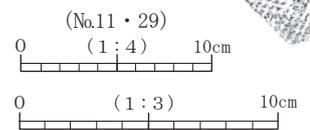
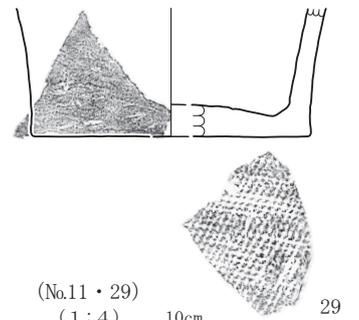
14層 (SK 14) 出土遺物



P 1 出土遺物



10トレンチ南側住居出土遺物



第47図 10トレンチ出土土器

線文＋条線文 1,522.99 g、紐線文＋条線文 283.95 g、条線文 769.04 gとなる。後期前葉の堀之内1式が約75%と著しく高い比率で、層的に見てもいずれの層でも堀之内1式土器の比率が高くなり、貝層の形成時期も同時期と考えられる。土器以外の出土遺物は、土製品が土器片錘1点、石器が石核2点、磨石3点、敲石5点、砥石1点、軽石製品1点である。骨角歯牙製品が管状垂飾1点（第99図31）、加工角1点である。

（2）8 トレンチ（第45図）

概要

8 トレンチは、西貝層中央やや南側の貝層散布範囲に東西方向に2×8mの規模で設定した。トレンチ西端で、貝層を切り込む新しい時期の掘り込みが検出された一方、トレンチ東側では堀之内1式期と考えられる土坑1基とピット6基が検出され、住居に伴うと考えられる（S I 09）。貝層は、トレンチ北側中央でやや面的に展開する部分とトレンチ北東部でピット内に貝層が検出された。

層序

層序は、1層耕作土、2層褐色土、2c層暗褐色土、3層暗褐色土、4～7層落ち込みに堆積する暗褐色土主体の土層となる。A～E層は混貝土層で、いずれもイボキサゴ主体の破砕貝を少量含む貝層である。B層は焼土、灰とともに被熱した破砕貝を含有する。C、D、E層はピット内に堆積した貝層と考えられる。

出土遺物

土器出土量は、精製土器が中期末～後期初頭 794.30 g、後期前葉 5,452.44 g、後期中葉 135.02 g、粗製土器が縄文のみ 2,503.20 g、縄文＋紐線文＋条線文 47.45 g、紐線文＋条線文 78.33 g、条線文のみ 13.56 gとなる。後期前葉の堀之内1式期の土器が著しく多く出土しており、貝層やピット群は堀之内1式期に伴うものと考えられる。1～9は堀之内1式土器である。なお、トレンチ南東部の2層と3層の境界から鹿角製の棒状加工品（第100図42）が出土した。その他の出土遺物は、土製品が土製円盤1点、石器が磨製石斧1点、石核1点、磨石1点である。

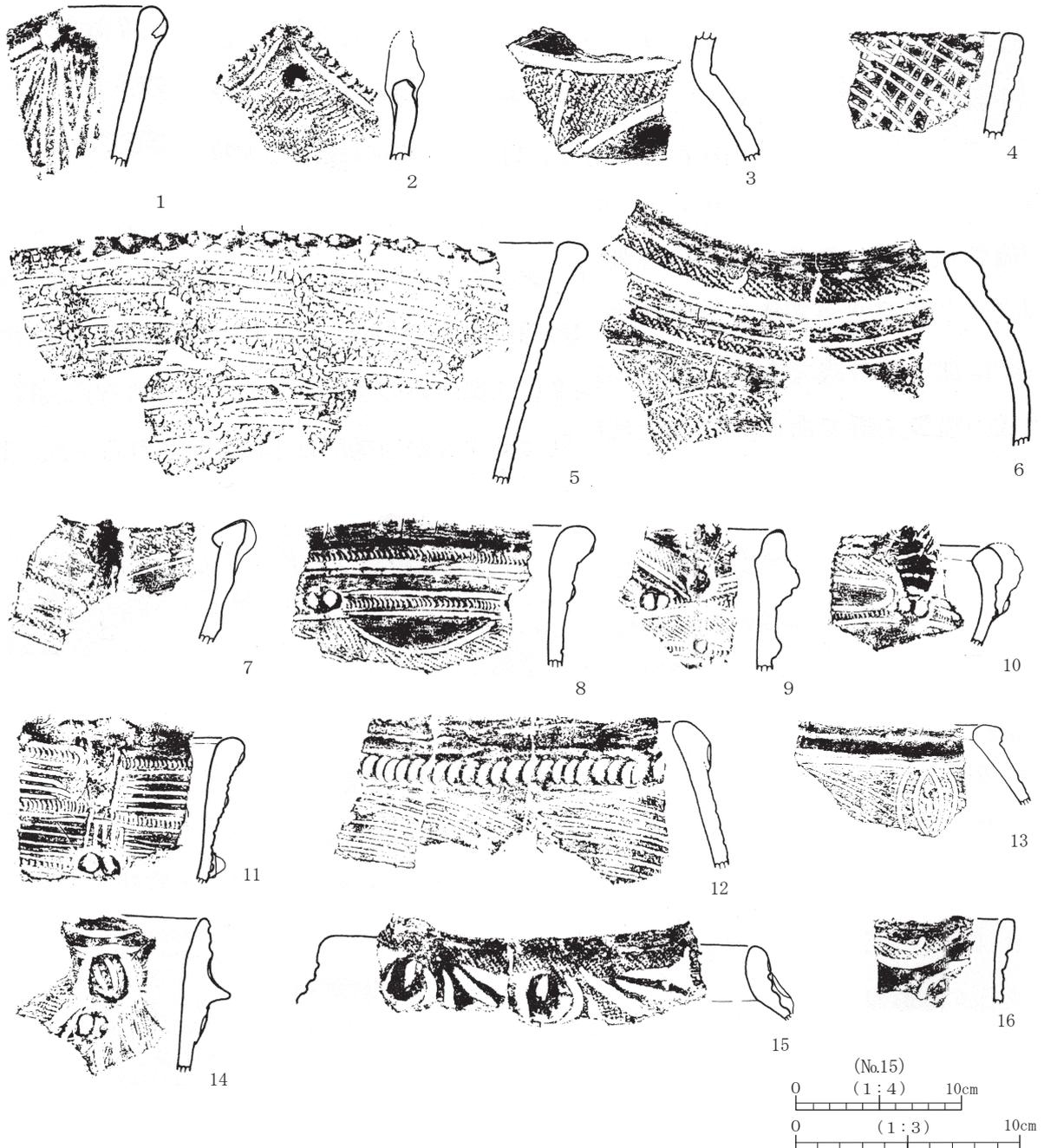
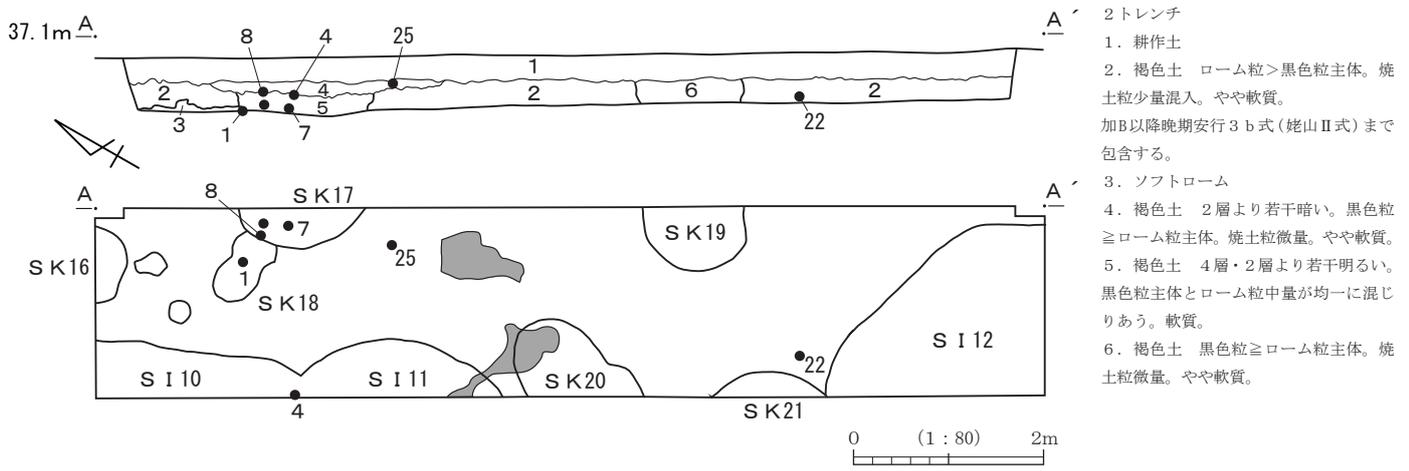
（3）10 トレンチ（第46・47図）

概要

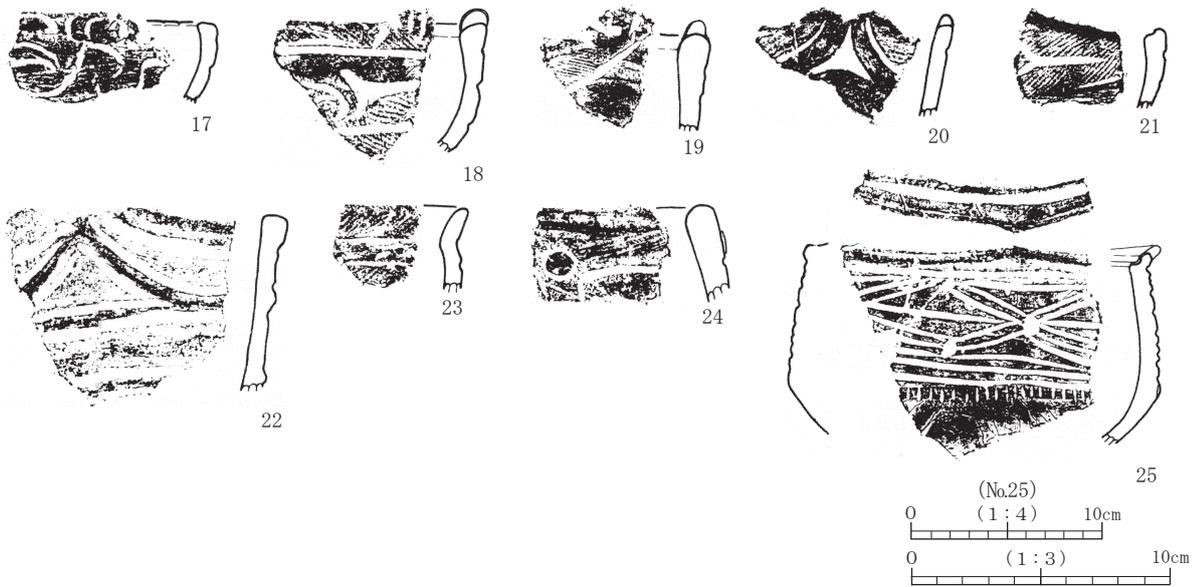
10 トレンチは、南北に展開する西貝層の貝層堆積範囲南端部に南北方向に2×8mの規模で設定した。第2次調査ではトレンチ全面の確認調査を実施し、第7次調査では北側4mの再調査を実施した。調査の結果、トレンチ北側3mの範囲で貝層が検出され、住居（S I 07）が1軒以上、土坑1基（SK 14）、ピット4基が検出された。住居と土坑は堀之内1式期と考えられるが詳細はそれぞれ第2・3節で述べる。ピットは住居に伴う可能性もあるが、貝層が検出されたP1に関しては、加曽利B式期の遺物が含まれることから、同時期の所産と考えられる。本トレンチで検出された貝層は、大きく3層（12、13、14層）と前述したP1内の貝層に分層されたが、出土遺物の関係から、P1と12層は加曽利B式期、13、14層は堀之内1式期に相当すると考えられる。第7次調査のサブトレンチにおいて、A、B2箇所の貝層サンプルを採取した。Aについては、12、13層を20×30×5cmの規模で①～⑤の5カット採取した。BはP1内の貝層について「サンプルあ」は先にピットの半分を一括して採取したもので、その後、残りの半分を堆積状況に合わせて「い～か」に分割して採取した。

層序

層序は、1層表土、2層暗褐色土、3～7層は住居に伴う土層で、3層は住居床面の硬化面となる。5層は灰層であるが、6層のピットに切られることから、本トレンチ内には1軒以上の住居が存在すると考えら



第48図 2トレンチ遺構配置図、出土土器(1)



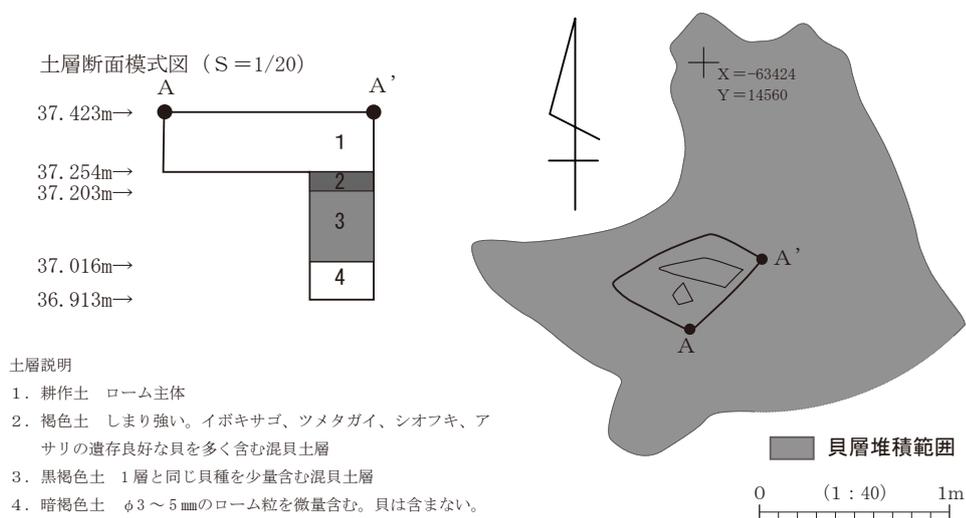
第49図 2トレンチ出土土器(2)

れる。9、15、16層はP1に堆積した混土貝層で、イボキサゴ、ハマグリ、シオフキを含み、一部に小型のシオフキの破砕貝が集中して認められた。貝層内からは第47図26、27の加曾利B式期の土器が出土した。12～14層は北側へ続く主要貝層の堆積状況である。12層はハマグリ、シオフキ、イボキサゴの破砕貝を主体とする混貝土層で、第47図11、12の加曾利B式期の土器や第75図10の山形土偶の脚部が出土していることから、加曾利B式期に形成された貝層と考えられる。13層はハマグリ、シオフキの破砕貝が主体となるが、12層より貝の含有量が少ない。なお、12層と13層の境界からは第92図51、54の石皿が出土している。14層はシオフキ主体の混貝土層で、SK14の覆土である。第102図15のイモガイ製の垂飾が出土した。貝層サンプル採取箇所層序は、Aサンプルの①②カットが12層(後期中葉)、③カットが12～13層(後期前～中葉)、④カットが13層(後期前葉)、⑤カットが10・13層(後期前葉)に相当する。なお、第4章第2節で述べるように、微小貝の分析からはAサンプルの②カットは後期前葉の可能性が指摘される。BサンプルについてはP1の覆土で後期中葉に相当する。

出土遺物

層位別に土器出土量をみると、12層は、精製土器が後期前葉2,979.99g、後期中葉158.56g、後期後葉19.38g、粗製土器が縄文のみ2,235.89g、縄文+紐線文が31.18g、縄文+紐線文+条線文が104.20g、紐線文+条線文が17.92gとなる。13層は、精製土器が後期前葉951.87g、後期中葉10.78g、後期後葉7.77g、晚期前葉19.78g、粗製土器が縄文のみ654.14g、縄文+紐線文+条線文が12.42g、紐線文+条線文が25.90gとなる。14層は、精製土器が、中期末葉36.26g、後期前葉196.44g、粗製土器が、縄文のみ84.14gとなる。P1は後期前葉23.63g、後期中葉18.47g、縄文+紐線文+条線文10.28gとなる。第47図1～12は12層出土土器である。1～7は堀之内1式、8～10は堀之内2式、11、12は加曾利B式である。12はAサンプル①カットから出土した土器である。13～17は13層出土土器である。13は称名寺式であろうか。14、15は堀之内1式、16は堀之内2式、17は縄文のみが施文される。

土器以外の出土遺物は、前述したように、土製品が12層から山形土偶の脚部1点(第75図10)、土器片錘1点、土製円盤1点、耳飾1点、石器が12層から石皿2点(第92図51、54)、13層から磨石1点、表土



第50図 山野貝塚南西部地点貝層

から磨石3点、砥石1点、軽石製品1点、碎片1点、骨角歯牙製品は骨角鏃1点(第98図4)、ヤス状刺突具1点(第98図16)、加工角3点、貝製品が貝刃12点(第102図3、11他)、ツノガイ製垂飾2点(第102図16、17)出土している。貝製品は、第7次調査時の表土層からの出土点数が多い点気になるが、全検出点数の半分弱が10トレンチから出土している。

3. 地点貝層

前述した主要貝層の周囲で数箇所の地点貝層が検出されている。これらは、北貝層と東貝層の間に設定した1、3トレンチ拡張部から検出されたS I 01、02及び前述した東貝層東側外縁部に設定した7トレンチから検出されたS I 06、西貝層貝層散布範囲に設定した8トレンチから検出されたS I 09の4軒の住居内貝層、東西及び北貝層の間に設定した2トレンチ、西貝層より南西側のH 22、I 22グリッドの境界で検出された地点貝層の4箇所です。また、周辺を踏査したところ、H 23グリッド付近においても耕作で検出されたと考えられる貝の廃棄が確認された。これらのことから主要貝層より南西側では、数箇所の地点貝層が展開している可能性がある。

住居内貝層については、それぞれの遺構の中で述べることとし、ここでは2トレンチと主要貝層より南西部のH 22、I 22グリッドの境界で検出された地点貝層について記述する。

(1) 2トレンチ(第48・49図)

概要

2トレンチは、東西、北貝層の中間の現状では貝層が散布していない箇所に北西-南東方向に2×10mで設定した。貝層はトレンチ中央部で、遺構確認面であるローム面より0.1mほど上方で2箇所検出された。いずれも0.1～0.13mの厚さで堆積している。その他、住居3軒(S I 10～12)、土坑と思われる落ち込みが5箇所検出された(S K 16～21)。これらについては、第2、3節で記載する。

層序

貝層部分については層序や含有する貝についての記載がないため不明である。2層は堀之内1式～安行3b式までを含有する褐色土、3層はソフトローム層、4、5層はS K 17覆土である褐色土、6層はS K 19の覆土である褐色土である。

出土遺物

土器出土量は、堀之内1式4,410.07 g、堀之内2式110.83 g、加曾利B式3,104.86 g、曾谷式260.48 g、安行1式1,948.48 g、安行2式443.23 g、安行3a式274.17 g、安行3b式246.70 g、粗製土器は縄文のみ2,741.56 g、縄文+紐線文393.01 g、縄文+紐線文+条線文2,602.27 g、紐線文+条線文2,842.72 g、条線文のみ6,992.82 gとなる。第48図1は堀之内1式、2～4は加曾利B式、5は加曾利B式に伴う粗製土器、6、7は安行1式、8～11は安行2式、12、13は後期安行式に伴う粗製土器、14、15は安行3a式、16、第49図17～24は安行3b式、25は櫃原式文様を有する晩期前葉の土器である。

土器以外の出土遺物は、土製品が、土製円盤10点、耳飾1点（第81図3）、土偶1点（第76図17）、石器は石鏃2点（第88図7、9）、石錐1点（第88図11）、二次加工ある剥片3点、剥片2点、石核3点、磨石7点、敲石1点、石皿1点、砥石1点、石棒1点、骨角歯牙製品が器種不明のイノシシ牙製品1点（第100図44）である。

（2）南西部地点貝層（第50図）

概要

南西部地点貝層は、平成25年4月に地権者が畑にゴミ穴を掘削した際に発見された貝層である。地権者からの連絡を受け、地権者が掘削した範囲での観察結果について記述する。

掘削された範囲は、長軸0.55 m、短軸0.5 mの方形状を呈し、深さは最も深いところで0.51 mを測る。周辺をボーリング調査したところ、南北2.4 m、東西2.6 mの範囲に不整形に貝層の堆積が確認された。これらの貝層は次で述べるように、0.15～0.2 mの深さに堆積している。また、貝層堆積以外の箇所では0.1 m強の深さで地山ローム層に到達することから、これらの貝層は何らかの窪みに形成された地点貝層であると判断できる。

同地権者の所有地では全体的に0.2～0.3 mの深さで耕作を行っているが、貝層が検出されたのは初めてのことである。なお、今回検出された貝層より北側では多くの土器が出土したとのことであった。

層序

層序は、1層耕作土、2層褐色混貝土層、3層黒褐色混貝土層、4層暗褐色土層で、貝層は2、3層の約0.19 mの厚さで堆積する。貝層断面を確認したところ、イボキサゴ、ツメタガイ、シオフキ、アサリが含まれる。

出土遺物

出土遺物は、文様が施されない部位の土器片1点である。掘削土中から目立った貝を採取したところ、イボキサゴ9点、ツメタガイ10点、イボニシ2点、アラムシロ2点、シオフキ2点（左右1点ずつ）、アサリ2点（左右1点ずつ）であった。

第2節 住居・土坑・埋葬人骨・中央窪地・盛土遺構

1 住居

住居は少なくとも13軒検出されている。内訳は、堀之内1式期9軒、加曾利B式期4軒である。堀之内1式期の住居は東貝層外縁部の7トレンチで1軒、西貝層外縁部の8トレンチで1軒、10トレンチで1軒、北貝層の北側貝層外の1・3トレンチ拡張区で5軒、西貝層の西側貝層外の16トレンチで1軒検出されている。加曾利B式期の住居は西貝層外縁部の4トレンチで1軒、各主要貝層の間に位置する2トレンチで3軒検出されている。以上のように、堀之内1式期の住居は主要貝層の外縁から外側に分布するのに対し、加曾利B式期～後期安行式期の住居は主要貝層の外縁から貝層範囲と同範囲付近に分布する傾向にある。以下、各遺構について記述する。